

平成23年3月31日

各位

株式会社 徳 ・ 株式会社 傳六
ノリックス株式会社 ・ 有限会社 和公
代表取締役 鷲岡和徳

前略、今月も業務に専心いただきありがとうございます。

春到来です。おかげ様で今月もどの店舗も売り上げ、利益ともども前年度より大きく業績を伸ばしています。お店の繁盛はお客様に支持されているということです。皆様の頑張りに感謝しています。

さて、3月11日東北地方に未曾有の大地震が発生し、多くの方が犠牲になり今も多くの方が避難生活をしています。皆様の親戚、知人の方でも被災された方が多くいるようにも聞いています。お亡くなりになられた方に対し哀悼の意を表するとともに被災地の少しでも早い復興を祈っています。

過日、産経新聞に載っていた話ですが後にハワイ州知事となる人物である日系兵士のジョージ・アリヨシ氏が戦後の我が国の復興についての記事を以下のように書かれています。

陸軍に入隊したばかりのアリヨシ氏は1945年秋、初めて戦後の東京の土を踏んだ。丸の内の旧郵船ビルを兵舎にしていた彼が最初に出会った日本人は靴を磨いてくれた7歳の少年だった。言葉を交わすうちに少年が両親を失い、妹と2人で過酷な時代を生きていかなばならないことを知った。当時東京は焼け野原だった。その年は大凶作で、1000万人の日本人が餓死するといわれていた。少年は背筋を伸ばし、しっかりと受け答えしていたが、空腹の様子は隠しようもなかった。

彼（アリヨシ）は兵舎に戻り、食事に出されたパンにバターとジャムを塗るとナプキンで包んだ。持ち出しは禁じられていた。だが、彼はすぐさま少年のところにとって返し、包みを渡した。少年は「ありがとうございます」と言い、包みを箱に入れた。

彼は少年に、なぜ箱にしまったのか、おなかはずいていないのかと尋ねた。少年は「おなかはずいています」といい、「3歳のマリコが家で待っています。一緒に食べたいんです」といった。アリヨシ氏は手紙にこのときのことをつづった。「この7歳のおなかをすかせた少年が、3歳の妹のマリコとわずか一片のパンを分かち合おうとしたことに深く感動した」と。又、「ああ日本は大丈夫だ。日本人は死んではない」と思った。少年は自分もひもじい思いをしていたらう。何日も食べていなかったかもしれない。しかしそんな環境の中で弱者をいたわる気持ちをもっていた少年にジョージは日本人を見た。

今回の震災で多くのものが不足し、しばらく国民が痛みを分かち合うことが必要な局面が出てくるであろう。今が我が国民の矜持を全世界に示す時と考える。今も避難されている方々のことを思いながら普段通りに自分のできることを一所懸命やろうと心に誓う。

【徳の経営理念】

「私たちはお客様のために常に新しいことに挑戦し、食生活に新たな価値を創造しつづけます。」

【徳のモットー】

「一膳入魂」～うまい料理は世の為、人の為～

すべては自分のために。

すべてはお客様のために。

すべては会社のために。

すべては社会のために。

来月も一緒に頑張りましょう

草々